

エリアアクティビティ

広告主名	一般社団法人ダイアログ・ジャパン・ソサエティ	期間	2025年8月2日 ～ 2025年8月11日
商品（サービス）名	ピース・イン・ザ・ダーク@広島「信頼の募金箱」	地域	広島市
施策名	信頼の募金箱	使用媒体	イベント・セミナー

1. 施策を行った背景や課題

悲劇は届いた。でも、希望は届いていない。

1945年、原爆で通帳も印鑑も失われた広島で、日本銀行広島支店は市民の申告だけで預金を払い出した。申告額と実際の残高はおおむね一致していた。「日銀の奇跡」と呼ばれたこの信頼の物語は、原爆の悲劇ほどには世界に届いていない。戦後80年、被爆者の高齢化とともに記憶は風化に向かい、世界では戦争や分断が絶えない今、「人を信じた事実」をどう体験として継承するかが問われていた。

2. 解決方法（SOLUTION）

蓋も鍵もない募金箱を80年前と同じ場所に置く

被爆80周年の2025年8月、日銀の奇跡が生まれたまさにその場所—旧日本銀行広島支店で、完全な暗闇の中で平和と信頼を体感する没入型イベント「ピース・イン・ザ・ダーク@広島」を開催（広島市・中国新聞社と共催、10日間）。そして体験の最後に、蓋も鍵もない「信頼の募金箱」を設置した。誰もが自由に出入りできる場所に、入れることも取ることもできる状態で置かれた箱。説明や啓発ではなく、参加者自身の行動によって「信頼の当事者」になる体験を設計した。

3. 結果

奪おうとする人は一人も現れなかった。

イベントは10日間で満員。体験後のアンケートでは参加者の96%が「人への信頼感が高まった」と回答した。誰でも手が届き、持ち出すこともできる募金箱に集まった総寄付額は196,496円。そして設置期間中、募金を奪おうとする人は一人も現れなかった。80年の時を超えて、同じ場所で同じ結論が証明された。人はお互いを信じあえる存在である。集まった寄付金はガザの子どもたちへ届けられ、広島の「希望」は国境を越えた。

4. 企画のポイント

信頼を"前提"に設計する

通常の社会は「疑い」から設計される。鍵をかけ、監視カメラを置き、管理する。本施策はその逆。信じることを前提に空間をつくった。蓋のない箱という構造自体がメッセージである。

日銀の奇跡という史実を"説明"から"体験"へ

80年前の出来事を語るのではなく、同じ場所で現代に再現した。参加者は知識として学ぶのではなく、自らの行動によって信頼の当事者になる。

過去の記憶を"現在の行動"へ接続

広島を記憶を美談として閉じるのではなく、集まった寄付金をガザの子どもたちへ届けることで、過去の信頼を現在の平和課題へとつないだ。

信頼の募金箱

UNCOVERED DONATION BOX

TRUST
PROJECT

チャレンジ

悲劇は届いた。でも、希望は届いていない。

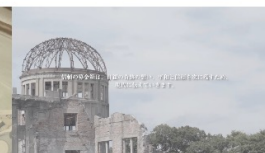
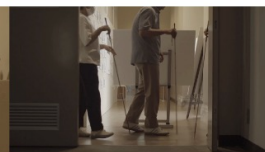
1945年、原爆で通帳も印鑑も失われた広島で、日本銀行広島支店は市民の申告だけで預金を払い出した。申告額と実際の残高はおおむね一致していた。「日銀の奇跡」と呼ばれるこの信頼の物語は、原爆の悲劇ほどには届いていない。戦後80年、記憶が風化に向かい、世界で戦争や分断が絶えない今、「人を信じた事実」を次世代に届ける方法が求められていた。



アイデア

蓋も鍵もない募金箱を80年前と同じ場所に置く。

被爆80周年の2025年8月、日銀の奇跡が生まれたその場所。旧日本銀行広島支店で「ピース・イン・ザ・ダーク@広島」を開催（広島市・中国新聞社と共催、10日間）。暗闇の中で1945年の広島を追体験した参加者が最後に会おうのが「信頼の募金箱」。蓋も鍵もなく、誰でも持ち出せる状態で置かれた箱。説明ではなく、行動で信頼の当事者になる体験を設計した。



結果

奪おうとする人は一人も現れなかった。

イベントは10日間満員。参加者の96%が「人への信頼感が高まった」と回答した。誰でも持ち出せる募金箱に集まった総寄付額は196,496円。募金を奪おうとする人は一人も現れなかった。80年の時を超えて、同じ場所で同じ結論が証明された。人はお互いを信じあえる存在である。集まった寄付金はガザの子どもたちへ届けられ、広島の「希望」は国境を越えた。

